学習行動による住民類型とその意識特性にみる地域生涯教育計画の課題
—静岡県小笠郡浜岡町での学習意識・行動調査をもとに—

角替弘志（静岡大学）
馬居政幸（静岡大学）

1．はじめに—研究の経過と本稿の課題—

地域社会において生涯教育という観点から教育機会を制度的に整備・充実させるためには，その前提として，学習主体である地域住民の学習への期待・意欲や学習活動の実態（学習の意思構造）が，客観的な教育環境（地域教育構造）との関係において，個々バラバラではなく全体構造（教育の意思構造）として解明されなければならない。

このような観点のもとに，その基礎的研究として，我々は静岡県内各地において広義の学習概念に基づき考案した成人の学習行動と学習意識に関する質問紙調査を実施してきた。そして，その調査結果をもとにして，成人の学習行動類型を把握することを課題として研究を進めてきた。

具体的には，昭和58年に御殿場市と田方郡土肥町，昭和60年に浜松市，昭和61年に静岡県全体，昭和62年に小笠郡浜岡町を調査する機会を得た。また，それぞれの調査結果の考察については，①日本生涯教育学会での口頭発表，②静岡大学教育学部研究報告での連載，③各調査報告書，において公表してきた。[1)]

特に，上記の研究課題との関わりにおいて，御殿場市と土肥町での成人の学習行動に関する調査結果を多変量解析数量化理論第III類により分析することから，学習行動類型の析出を試みた。その結果，御殿場市，土肥町それぞれ8種の学習行動類型を明らかにすることができた。（表-1）

だが，さらに研究を進める中において，このような手順により把握した類型には，次のような問題点があることもまた明らかになった。

第一に，数量化第III類により析出された行動類型は，あくまで学習行動の類型

表-1　御殿場調査と土肥調査より明らかになった学習行動類型

御殿場調査	①地域活動型　②学級参加型　③スポーツ娯楽型　④スポーツ学習型 ⑤教養学習型　⑥文化鑑賞型　⑦資格学習型　⑧研修・視察型
土肥調査	①教養学習型　②趣味学習型　③参加創造型　④文化鑑賞型 ⑤資格学習型　⑥奉仕学習型　⑦地域活動型　⑧スポーツ型

であって住民の類型ではないことに伴う問題である。

すなわち，御殿場調査と土肥調査で析出された類型は，御殿場市や土肥町に住む成人の学習行動の傾向がそれぞれ類似した8種類のパターンに分かれることを意味する。だがそれは，御殿場市や土肥町にこのような学習行動パターンの8種類の住民が住んでいるということではない。いいかえれば，8種の学習行動類型全てに参加する人もあれば，1種類のみの人もあることになる。そのため，学習行動類型とその類型に属する住民との関係，さらにその住民と生活する地域の学習環境の特性との関係をトータルに把握するには，問題があった。

他方，地域社会において生涯教育（学習）を推進する上で必要なことは，冒頭に提起したように，具体的な住民一人一人の学習行動や意識の傾向（学習意思構造）とその住民が生活する地域の学習環境（地域教育構造）との関係のトータルな把握である。その第一段階として学習行動類型を析出したわけである。

従って，析出された学習行動類型をもとに住民と学習環境の関係を明確に，また全体として把握する方法の開発が新たな課題となった。

第二に，学習行動類型の析出過程自体にも困難な問題があった。

すなわち，学習行動類型は，30種の学習行動の調査結果を数量化理論第III類により分析し，その結果析出されたカテゴリーウエイト値をもとに描かれる三次元グラフから把握した。しかし，三次元グラフからの読み取りは必ずしも容易ではなく，読み取る側の恣意性をコントロールすることもかなり困難であった。また，そのためかグラフを構成している三本の軸の性格を明確に意味づけることができなかった。その結果，類型相互の関係（構造）を把握しきれないままに終わらざるをえなかった。

以上の問題点について種々検討した結果，静岡放送情報システム局の渡辺治彦氏の協力を得て，浜岡町における調査結果の分析に対しては，因子分析（主因子法）とクラスター分析（ワード法）を併用する手法を試みることにした。

すなわち，まず，学習行動類型を直截に求めるのではなく，31種の学習行動に対する因子分析により各学習行動に潜在する共通因子を抽出することから始めた。そして，その抽出された因子の意味を，各学習行動に与えられた因子負荷量の特

表-2　浜岡調査による学習行動因子

①地域活動因子	②集団・参加学習因子	③スポーツ因子	④個人学習因子
⑤研修・旅行因子	⑥文化鑑賞因子	⑦資格学習因子	

性から読み取った。その結果明らかになったのが，表-2に示す7種の学習行動因子である。[2)]

次に，7種の学習行動因子に対する調査回答者個々の因子得点を産出し，それを基にしたクラスター分析により，8種のクラスターを析出した。これは，調査対象である浜岡町の成人が，その学習行動の仕方の相違により8種類のグループに分かれることを意味する。すなわち，学習行動の傾向により浜岡町の住民は8種に類型化される可能性が明らかになったわけである。

そこで次に，このように8種の類型（クラスター）に分けることが学習行動による住民の類型として妥当であるかどうかを考察し，さらに，各類型の意味を読み取るために，先ず，各類型に与えられた学習行動因子の因子得点の平均点を解釈した。さらに，各類型に属する住民の性，年齢，職業等の属性上の質問項目や学習行動とのクロス集計の結果を解釈した。その結果，明らかになったのが図-1に示した類型A～Hまでの住民類型の特性ならびにそれに基づくネーミングとイラストである。

以上に示したように，我々は，御殿場調査と土肥調査の分析で問題となった二つの課題を，因子分析とクラスター分析を併用した浜岡調査における住民の類型化により解決することを試み，一応の成功をみた。しかし，本当の課題はここから始まるといえる。すなわち，学習行動類型を析出した本来の目的は，その析出過程や結果の分析において，地域における生涯教育計画推進の課題を解明することであった。その意味で，浜岡調査における学習行動特性に基づく8種の住民類型が，浜岡町の地域特性や学習環境等の地域教育構造とどのような関係にあるのかが問われなければならない。さらにそのためには，各類型に属する住民の学習状況や学習環境に対する意識特性を多元的に把握する必要がある。

そこで本稿では，先ず，浜岡町の地域特性，あるいは浜岡町成人の学習行動・意識傾向の静岡県全体における位置を把握するために，次の三調査の学習行動に関する調査結果の比較を中心に考察する。[3)]

① 浜岡町成人調査

② 成人調査と同時に実施した浜岡町有識者調査

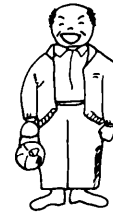
③ 浜岡調査の前年に実施した静岡県民調査

図-1　学習行動による候民類型の特性ならびにネーミングとイメージイラスト

類型A　「がんばるお母さんグループ」

30代後半の子育て中の地元の女性が多く，つきあい程度の地域活動以外は学習していない。
19.8%

類型B　「活躍する役職おじさんグループ」



地域活動に熱心な地元の中高年の男女。いわば地域有力者。特に男性はほぼ全員役付き。農業に従事し講習会や旅行にはよく積極的に参加するが勉強は苦手。
7.5%

類型C　「頼れるお父さんグループ」

地元の30代後半男性。地域活動には進んで参加し役職も持っている。特にスポーツは欠かさない。学歴も低くないが，美術などを鑑賞すること以外には特別な勉強はしていない。いわば，浜岡のこれからの担い手。
6.2%

類型D　「新住の若い専門家グループ」

浜岡に新たに住むようになった若い男性が典型。学歴が高く，事務や専門職が多い。学習意欲は高く，テレビや通信教育で学びスポーツや資格を取ることには関心が高いが，地域活動へは参加しない。
11.1%

類型E　「るんるんギャル・ママグループ」

浜岡に新たに住むようになった主婦を含めた若い女性が典型。地域に関しては拒否に近く本調査が前提とする学習行動には参加せず。
13.1%

類型F　「土地っ子若い衆グループ」

地元の若い男子が中心。そのためか地域活動を拒否しないが，特にやるわけでもない。高卒で工員や専門職が多く，資格を取ることは熱心。だが，他の勉強には関心なし。
17.5%

類型G　「活躍する中年婦人グループ」

地元の中年以上の主婦が中心。自営や農地を持っている人が多い。文化祭に出品し，自ら参加するなど，浜岡で行われる学習活動に最も熱心に関わる人達。
17.5%

類型H　「インテリシルバーグループ」

地元の学歴の高い高年令の男女。農業に加え会社経営や専門・自由業が多い。全般的に学ぶことに積極的で，特に個人で学習することが多い。いわば，現在の浜岡のリーダー。
7.3%

次いで，8種の住民類型相互の関係を学習行動と学習意識上の特性を改めて問うことから明らかにする。そしてその過程において地域住民を主体者とする生涯教育計画を推進する上での課題を提起していきたい。

なお，因子分析とクラスター分析による類型析出過程の詳細な検討は注1）に示す『成人の学習行動の分析に関する基礎的研究（III）』を参照していただきたい。また，本研究は昭和62年度，63年度，平成元年度の科学研究費補助金（一般研究(c)）により進めているものである。従って，現在も継続中であり，最終報告は平成2年3月に行う予定である。その意味で，以下の論考は中間報告としての性格を持つものであることをお断りしておきたい。

2．学習行動を中心とする「浜岡成人」「浜岡有識者」「静岡県民」相互の比較による浜岡町成人の特性

(1) 浜岡町の地域特性

浜岡町は遠州灘に面し御前崎の西側にある人口約2万の小さな町である。昭和30年代には，全国の農漁村と同様に過疎化の中にあった。それが，昭和40年代半ばに，中部電力が原子力発電所を建設したことを契機に急激に都市化していった。その結果，現在は，基本的には旧来の農業を基盤とする生活様式や地域組織が保持されているが，新住民や若者を担い手とする都市的文化もまたかなりの速度で浸透しているという，新旧が混在する町になっている。

我々の調査は，このような町の状況を住民が8種に分類されるという結果により証明したといえよう。しかし，この8という数が多いか少ないかは意見の分れるところであろう。都市部ではより細分化され，農村部ではそれほどでもないという意見もあろう。

一方，浜岡町は，原子力発電所誘致に伴う豊かな財源をもとに，公民館や児童館，あるいは体育館や運動場等を建設・整備し，社会教育施設設置状況は静岡県内ではトップクラスにある。年間の全体予算規模も市レベルの大きさである。

このように浜岡町の特色をとらえる時，浜岡町での調査結果は浜岡町のみに妥当し，一般化できない，という指摘がなされても不思議ではない。事実，「浜岡は特別ですから」と語る静岡県内の他市町村の社会教育担当者に出会う機会は多い。あるいは，昨年の日本生涯教育学会第9回大会で発表した際に，もっと細分化した分類にすべきだとの意見もいただいた。

そこで，住民を分類する基礎データとなった31種の浜岡町成人の学習行動の調査結果が，静岡県全体の平均値と比較してどのような位置にあるかを検討することから，一般化することの妥当性について考察したい。

(2) 学習行動における「浜岡成人」「浜岡有識者」「静岡県民」相互の比較

表-3は31種の各学習行動に「参加した」と回答した者の比率を，浜岡町の「成人」，「有識者」，静岡県の「県民」の順に列記したものである。また，相互の比較を容易にするために，5％以上の差を基準に参加率が高い方から，○，△，×の印をつけ，「有識者」と「成人」「県民」との差を記した。

先ず，○印に注目すると，「有識者」は31項目中30項目が○付き。唯一の△印である「2．先生習いごと」も○との差は最低の5％である。全体として，本調査が前提とした学習行動への「有識者」の参加率は圧倒的に高いといえる。

「成人」と「県民」の差に注目すると，△が「成人」と「県民」双方についている項目は10。双方とも○が6。従って，両者の差がほとんどない学習行動は全体の過半数に当たる16項目になる。また，「成人」のみ△の学習行動と「県民」のみ△の学習行動をあげ，その中で両者の差が10％以上のものに◎をつけたのが表-4である。

『「成人」のみ△項目』はいずれも地域を舞台に集団で行われる傾向が強い活動や学習である。それに対し，『「県民」のみ△項目』は特定の施設や明確な目的をもって個人で行う傾向が強い学習が多い。また，浜岡町には，公民館や町民会館等の地域施設は整備されているが，美術館，博物館，図書館は，いずれもないことから，学習環境による機会の差が影響しているともいえよう。さらに，この傾向は◎がついた6項目をみるとより顕著である。

ただし，「成人」と「県民」の差は最も大きい項目でも14％である。それに対し，同じ浜岡町民でありながら，「成人」と「有識者」の差は，「10．研修会・講習会」の46％を最高に，「成人」と「県民」の差よりもかなり大きい項目が多いといえる。

これらの点から，浜岡町の成人は静岡県全体と比較して，地域と関わりが強い学習行動（一般に集団で行う学習が多い）に参加する度合いが高いが，逆に個人で行う学習への参加率は低い。但し，両者の差よりも，浜岡町内部の「成人」と「有識者」との差の方が顕著であることがより特徴的といえる。また，「有識者」の場合，他の二者に比較して特に高い参加率を示す項目は，地域での人間関係や組織と関係する活動や学習が多いことも指摘できる。(表-3※印参照)

ところで，一般に地域に関わる活動や学習への参加度は農村部から都市部に移るに従い低下するといわれる。我々が実施した県民調査でも，そのことは確認されている。

浜岡町の場合，上述したように，その地理的条件から，通常は基本的に農村部として位置づけられる。確かに「有識者」は，「成人」「県民」との比較からみて，農村部の性格を色濃くもつことが確認できる。「成人」も「県民」との比較では地

表-3　学習行動における「浜岡成人」「浜岡有識者」「静岡県民」相互の比較

	浜岡町		静岡	三者の差	
	①成人	②有識者	③県民	②−①	②−③
1．学級・講座参加	△31	○45	×17	14	18
2．先生について習いごとした	○23	△18	○24	−5	−6
3．図書館に行った	×23	○49	△30	26	19
4．テレビ・ラジオで勉強	△15	○24	△15	9	9
5．通信教育で勉強	7	8	6	1	2
6．カルチャーセンター	3	7	4	4	3
7．免許・資格を学校で勉強	21	17	19	−4	−2
8．免許・資格を個人で勉強	21	21	22	0	−1
9．所属団体の研修会・講習会	△56	○89	×50	※33	※39
10．研修・視察のため旅行	△40	○86	△38	※46	※48
11．講演会に行った	△52	○89	△53	※37	※36
12．音楽会・演劇に行った	△46	○60	△44	14	16
13．展覧会に行った	×46	○68	△53	24	15
14．スポーツ・観戦でかけた	△51	○69	△53	17	16
15．美術館・博物館に行った	×36	○66	△48	※30	18
16．文化祭などに出場	△15	○21	△15	6	6
17．文化祭などに出品	× 8	○14	○14	6	0
18．新聞や雑誌などに発表	△ 3	○12	△ 3	9	9
19．スポーツ大会に出場	△48	○67	△44	19	23
20．ボランティア活動	△33	○58	×22	25	※36
21．趣味のグループで勉強	27	28	29	1	−1
22．スポーツ・グループ運動	△34	○46	△32	12	14
23．健康・一人で運動	×26	○36	○33	10	3
24．趣味・一人で勉強	×34	○53	△44	19	9
25．公民館、町民会館に行った	△81	○93	×73	12	20
26．町や地区の祭りに行った	△79	○86	×73	7	13
27．地域の体育·文化祭に行った	△69	○84	×61	15	23
28．地域清掃・消防に参加	△63	○85	△65	22	20
29．青少年活動に参加	△38	○70	×28	※32	※42
30．地域の団体・会合に出た	△44	○68	×38	24	※30
31．地区や班・町内会に出た	△63	○85	×53	22	※32

表-4 「浜岡成人」「静岡県民」の学習行動の比較

『「成人」のみ△項目』	『「県民」のみ△項目』
◎1．学級・講座参加（14）	3．図書館（7）
9．研修会・講習会（6）	13．展覧会（7）
◎20．ボランティア活動（11）	◎15．美術館・博物館（12）
25．公民館、町民会館（8）	17．文化祭などに出品（6）
26．町・地区・祭り（6）	23．健康・一人で運動（7）
27．地域体育・文化祭（8）	◎24．趣味・一人で勉強（10）
◎29．青少年活動参加（10）	（ ）内は両者の差、数値は％
30．地域の団体・会合（6）	小数点は四捨五入
◎31．地区や班・町内会（10）	

表-5 「浜岡成人」「浜岡有識者」「静岡県民」の地域に対する意識の比較

①「そう思う」 ②「どちらかといえばそう思う」	浜岡成人		浜岡有識者		静岡県民	
	①%	②%	①%	②%	①%	②%
地域の会合には必ず出席すべき	66	23	75	20	66	24
地域よりも個人的事情を優先すべき	12	22	2	22	9	20

域との関わりは強い。しかし他方で，「成人」の場合は「県民」との差よりも町内の「有識者」との差の方がかなり大きい。その意味で，むしろ「県民」の平均に近いといった方がより正確かもしれない。とすれば，浜岡町にも都市化の波が確実に押し寄せていることもまた容易に想像できる。

この傾向を意識の側面から確認するために用意したのが表-5である。

この表に示すように，「地域の会合には必ず出席すべき」という質問に，「そう思う」と強く肯定した「有識者」が75％であるのに対し，「成人」「県民」はともに66％である。逆に，「地域よりも個人的事情を優先」には，「そう思う」と答えた者の比率は，「成人」が12％，「県民」が9％であるのに対し，「有識者」は僅か2％で最も低い。

この結果をみる限り，「成人」の場合，意識の面での地域離れの速度は行動よりも早いようだ。浜岡町の都市化はかなり進んでいるといえる。

だが他方で，「有識者」という現在の浜岡町をリードする人達にとっては，意識のレベルにおいても，地域は非常に重要なファクターとして捉えられていることもまた確認できる。

「成人」とは浜岡町の20歳以上の成人の中から無作為で抽出した1,000名に対する調査結果の平均値である。その意味で町全体の平均的な成人の行動と意識を現していると考える。どうも，町のリーダー達と一般の町民の間にはかなりの断層

があることは間違いないようである。加えて，浜岡町全体の傾向が静岡県全体の平均に近いことから，この断層は明らかに一般の町民の意識と行動の方向に向かって高くなっているといえる。

そして，実は，このような一般の住民とリーダー達のズレこそ，全国各地において，旧来の地域組織や活動を基盤として生涯教育を推進している方々の最も苦慮している問題の一つではないだろうか。いいかえれば，それは，生まれ育った土地の縁を最も重視する人達を中心にしながらも，移り住んできた様々な人達を巻き込みつつ，異質な人達が共に生活する場を再構築すること，すなわち，地域づくりと一体となった生涯教育（学習）のあり方を模索する場合にとっての問題である。逆に，それは，個人主義的文化を基調とした人間関係が一般化している中で，個々人のニーズにより多種多様な教育機会を選択することを前提とした都市的世界での生涯学習の問題ではない。

地域における生涯教育推進の問題をこのように捉えるならば，有識者と成人一般との断層，さらにはその成人が8種に分かれるという浜岡町の現状が提示する問題は，決して浜岡町独自のものではないと考える。むしろ，浜岡町成人の傾向が静岡県の平均に近いことを考慮すれば，8類型相互の関係の中に，今日の全国各地の地域における課題が典型的かつ集中的に込められていると考えたい。

そこで，次に改めて学習行動に基づく8種の住民類型の特性について考察するが，その前に，以上の記述からも理解されると考えるが，我々がその課題を追求しようとする地域とそこでの生涯教育計画とは，次の三つの条件のもとで推進されるものであることを定義しておきたい。

① 大都市や地方中心都市ではなく，都市化の影響は避けえないものの，今日でも伝統的な地域組織が一定の機能を果たしている中規模以下の市町村における生涯教育（学習）

② 行政区域をベースとしながらも，日常的な人間関係・コミュニケーションを恒常的に保つことが可能な範囲，という意味での「地域社会」の住民が主体となる生涯教育（学習）

③ 国や県や民間ではなく，市町村教育委員会・行政がバックアップする生涯教育（学習）

なお，本稿では「教育」の意味を「学習」の制度的な保障という観点において捉える。そのため，「生涯教育」という言葉は，主として，教育委員会・行政や地域組織のあり方，あるいは行政施策上の問題に関わることを意味する用語として

使用する。また,「生涯学習」は学習主体である住民個々のあり方の問題に関わることを意味する用語として使用する。そして,双方の問題や課題に関係することについては,「生涯教育(学習)」と記すことにする。

3. 学習行動に基づく住民類型相互の特性と課題

(1) 各類型の学習行動参加率と住民比率の比較

表-6は,各住民類型相互の関係を捉えるために,先ず左側の欄に,31種の学習行動項目を,それぞれ参加率の最も高い類型(◎)と著しく低い類型(×)に分配したものである。また右側の欄に,58種の学習意識項目それぞれを,その肯定度(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」)が最も高い類型(◎)と低い類型(×)に分配したものである。なお,類型間の差が4%以内の項目は双方に配置し,またそれ以上の差があっても類型の特色をみるために必要な項目は○印をつけその類型に配置した。

まず,31種の学習行動のどの項目がどれくらい各類型に分配されているかを把握し,ついで,それをその類型に属する人達の住民全体に占める割合と比較すると,次のような特性が明らかになる。

参加率の高い学習項目が18と最も多いのは類型Hだが,この類型に属する住民は全体の7.3%にすぎない。二番目は学習項目11の類型Cだが,やはり住民比率は6.2%で最も小さい類型である。三番目は6項目の類型Bと類型G。類型Bは7.5%でやはり小さいが,類型Gは17.5%と大きくなる。そして五番目が3項目の類型Aと類型Dと類型F。類型Aは住民比率が最も高く19.0%,類型Dも11.8%で小さい方ではない。類型Fも17.6%と二番目に大きい類型である。

ただし類型Dはいずれも○印。その理由は,類型Dには他の類型と比較して参加率が最も高い学習行動はなく,その特性を把握するために,参加率が二番目だが一番目と差が少ない学習行動項目を拾ったからである。

さらに,二番目の参加率の学習行動項目すら全くないのが類型Eである。しかもその住民比率は13.1%で小さくはない。

我々が用意した31の学習行動項目は「25. 公民館,集会所,町民会館などに行った」に代表されるように,地域での学習機会の可能性を可能な限り広範囲に捉えるためにかなり広義の学習概念のもとに準備した項目である。それも,一年に一回でも参加すれば「行動した」としてカウントされる質問である。従って,31種がかなり分散する形で類型が形成されることを予想して考察した。

しかし,実際には,この調査結果が示すようにどうも特定の人達に学習行動は

表-6　各類型相互の学習行動と学習意識の比較表

	学習行動		学習意識	
	参加率の高い項目	参加率の低い項目	肯定率の高い項目	肯定率の低い項目
類型A 19.8%	◎25. 公民館、集会所、町民会館などに行った ◎26. 祭りにいった ○28. 地域の清掃活動・防災活動	×2. 先生習いごと（0） ×5. 通信教育（0） ×6. カルチャーセンター（0） ×17. 文化祭・作品・出品（0） ×18. 新聞、雑誌などに発表（0）	◎18. 子供・クラブ活動熱心よいこと ◎20. 子供・家庭で手伝いさせるべき ◎29. したいことできる青年のみ ◎36. 地域活動参加大切 ◎43. スポーツ良き仲間 ◎56. 浜岡町は体育・スポーツ施設十分	×11. 自由な時間（余暇）増える ×44. 趣味やスポーツ経費自己負担
類型B 7.5%	○1. 学級・講座参加 ○9. 所属団体の研修会・講習 ◎10. 研修・視察・旅行(男100%) ◎20. ボランティア活動(女性71%) ◎30. 地域の団体の会合に出た ◎31. 地区や班・町内会の会合に出た	×2. 先生習いごと（0） ×6. カルチャーセンター（0） ×7. 免許・資格・学校（0） ×17. 文化祭・作品・出品（0） ×18. 新聞、雑誌などに発表（0） ×5. 通信教育（1人） ×8. 免許・資格・個人（1人） ×16. 文化祭等に出場（2人）	◎2. 社会の変化・大変 ◎14. 仕事はほどほど・のんびり ◎17. 子供は遊びより勉強 ◎30. 青年・多少行き過ぎ容認 ◎32. 祖父母・孫の面倒 ◎34. 老人は老人だけで ◎38. 父・夫は家事無し当然 ◎46. 浜岡町・成人学習活動盛ん ◎49. 町民は大学や短大で勉強する意欲ある ◎57. 地域の公民館・集会所は地域の十分活用	×4. 学校の勉強での知識・技術だけでは不十分 ×12. ゆとりは趣味や楽しみを持つことから ×16. 近隣付き合い面倒 ×35. 地域の人達は助け合うべき ×58. 地域よりも個人的事情を優先
類型C 6.2%	◎9. 所属団体の研修会・講習 ◎13. 展覧会 ◎14. スポーツ・観戦 ◎15. 美術館・博物館 ◎19. スポーツ・出場(100%) ◎22. スポーツ・サークル・運動 ◎25. 公民館、集会所、町民会館などに行った ◎27. 地域体育祭、文化祭などに行った ◎28. 地域の清掃活動・防災活動 ◎29. 青少年のための活動に参加	×2. 先生習いごと（0） ×6. カルチャーセンター（0） ×18. 新聞、雑誌などに発表（0） ×5. 通信教育（2人） ×7. 免許・資格・学校（3人） ×8. 免許・資格・個人（1人） ×17. 文化祭・作品・出品（2人）	◎1. 社会の変化・激しい(100%) ◎4. 学校の勉強での知識・技術だけでは不十分 ◎9. 日常生活、知識・教養必要(100%) ◎12. ゆとりは趣味や楽しみを持つことから ◎24. 主婦・趣味やスポーツ、良いこと ◎26. 団・サークルの青年好ましい ◎32. 祖父母・孫の面倒 ◎35. 地域の人達は助け合うべき ◎45. 市町村の趣味的学習・スポーツ奨励への援助必要 ◎53. 大学や研究所を住民望む	×15. 地域つながりが薄くなった ×21. 子供・束縛せずに育てるべき ×34. 老人は老人だけで ×46. 浜岡町・成人学習活動盛ん ×47. 勉強機会や場、浜岡町多い ×48. 気軽に図書館(室)などで勉強する雰囲気が町民にある ×49. 町民は大学や短大で勉強する意欲ある ×50. 学習情報容易 ×55. 浜岡町は文化施設十分 ×56. 浜岡町は体育・スポーツ施設十分
類型D 11.1%	○4. テレビ・ラジオ ○5. 通信教育 ○23. 健康のため、自分一人で運動		◎13. 趣味・楽しみに時間・経費惜しむな ◎15. 地域つながり薄くなった ◎22. 婦人も職業をもった方が良い ◎39. 父は子の教育かかわるべき ◎40. スポーツ試合勝つ ◎41. スポーツ練習技量 ◎42. スポーツは健康 ◎44. 趣味やスポーツ経費自己負担 ◎52. 学校を地域に開放 ◎54. 学級や講座・教育委員会で開け ◎58. 地域よりも個人的事情を優先	×3. 学歴より実力 ×28. 青年期・勉強や仕事に打ち込むべき

	学習行動		学習意識	
	参加率の高い項目	参加率の低い項目	肯定率の高い項目	肯定率の低い項目
類型E 13.1%	全て低い行動率	×5．通信教育 ×4．テレビ・ラジオ ×6．カルチャーセンター（0） ×9．所属団体の研修会・講習（21%） ×10．研修・視察・旅行（11%） ×14．スポーツ・観戦（18%） ×18．新聞・雑誌などに発表 ×20．ボランティア活動 ×21．趣味のグループで勉強（6%） ×22．スポーツ・サークル・運動（9%） ×23．健康のため、自分一人で運動（14%） ×25．公民館・集会所、町民会館などに行った（29%） ×26．祭りに行った（36%） ×27．地域体育祭・文化祭などに行った（16%） ×28．地域の清掃活動・防災活動（6%） ×29．青少年のための活動に参加（5%） ×30．地域の団体の会合に出た（6%） ×31．地区や班・町内会の会合に出た（11%）	○5．生活便利で勉強あまり必要なし ○16．近隣付き合い面倒 ○21．子供・束縛せずに育てるべき	×1．社会の変化・厳しい ×6．仕事の勉強しなければ置き去り ×7．仕事のため無理にでも勉強 ×8．資格や免許とっておく ×9．日常生活、知識・教養必要 ×10．生涯学習必要 ×18．子供・クラブ活動熱心よいこと ×19．子供・地域活動参加すべき ×20．子供・家庭で手伝いさせるべき ×23．主婦・婦人会や婦人学級参加望ましい ×24．主婦・趣味やスポーツ、良いこと ×25．主婦・家事や育児が最も大切な仕事 ×26．団・サークルの青年好ましい ×27．高・大生は地域活動参加すべき ×31．老人・知恵や能力を社会に ×36．地域活動参加大切 ×37．地域会合出席 ×39．父は子の教育にかかわるべき ×42．スポーツは健康 ×43．スポーツ良き仲間 ×45．市町村の趣味的学習・スポーツ奨励への援助必要 ×51．浜岡町文化活動盛ん ×52．学校を地域に開放 ×53．大学や研究所を住民望む ×54．学級や講座・教育委員会で開け ×57．地域の公民館・集会所は地域の十分活用
類型F 17.6%	○5．通信教育 ○7．免許・資格・学校 ○8．免許・資格・個人		特に顕著な肯定的意識はない	×14．仕事はほどほど・のんびり ×33．老後のために特技を身に付けておく
類型G 17.5%	○1．学級・講座参加 ○2．先生習いごと ○6．カルチャーセンター ○16．文化祭等に出場 ○17．文化祭・作品・出品 ○21．趣味のグループで勉強		○8．資格や免許とっておく ○23．主婦・婦人会や婦人学級参加望ましい ○42．スポーツは健康 ○47．勉強機会や場、浜岡町多い ○51．浜岡町文化活動盛ん ○55．浜岡町は文化施設十分	×30．青年・多少行き過ぎ容認 ×38．父・夫は家事無し当然
類型H 7.3%	○3．図書館 ○4．テレビ・ラジオ ○5．通信教育 ○6．カルチャーセンター ○9．所属団体の研修会・講習 ○10．研修・視察・旅行 ○11．講演会 ○13．展覧会 ○12．音楽会などに行く ○15．美術館・博物館 ○17．文化祭・作品・出品 ○18．新聞、雑誌などに発表 ○20．ボランティア活動 ○23．健康のため、自分一人で運動 ○24．趣味・関心・一人で勉強 ○25．公民館、集会所、町民会館などに行った ○28．地域の清掃活動・防災活動 ○31．地区や班・町内会の会合に出た		○3．学歴より実力 ○6．仕事の勉強しなければ置き去り ○7．仕事のため無理にでも勉強 ○10．生涯学習必要 ○11．自由な時間（余暇）増える ○19．子供・地域活動参加すべき ○25．主婦・家事や育児が最も大切な仕事 ○27．高・大生は地域活動参加すべき ○28．青年期・勉強や仕事に打ち込むべき ○31．老人・知恵や能力を社会に ○33．老後のために特技を身に付けておく ○37．地域会合出席 ○44．趣味やスポーツ経費自己負担 ○48．気軽に図書館（室）などで勉強する雰囲気が町民にある ○55．浜岡町は文化施設十分	×2．社会の変化・大変 ×22．婦人も職業をもった方が良い ×29．したいことできる青年のみ ×32．祖父母・孫の面倒 ×40．スポーツ試合勝つ ×41．スポーツ練習技量

集中するようだ。加えて，学習行動への参加率が高い類型は量的には必ずしも町全体の多数派ではないという傾向が見られる。

特に類型Eの存在は意外であった。我々が用意した学習行動項目では，いずれにも参加する率が低いという消極的な側面でしかこの類型に属する人達の特性を捉えることができなかったわけである。いいかえれば，我々が前提とする地域での生涯教育の機会の枠外にこの類型に属する人達は生活していることになる。加えて問題なのは，この類型は8類型中4番目の大きさで決して少数派ではないことである。むしろ，上述したように，全体的に参加率の高い学習行動項目が少ない類型の方が住民比率は高いことを考えれば，類型Eこそ今後の地域と住民との関係の問題性を暗示している類型かもしれない。

前節で述べたように，浜岡町の有識者と平均的な成人との間にはかなり傾向に差があった。この差が実は，従来，当然参加すべきものとして考えられてきた地域での活動や学習機会に対して，類型Hに代表される参加率の高い類型に属する住民と類型Eを典型とする参加率の低い類型の住民との差であるのかどうか。この点に注目しながら，上記の比較では類似した傾向として捉えられた類型を改めて相互に比較しつつ，各住民類型の学習行動・意識の内容上の特性について，図-1を用いて把握したい。そして，その過程において，生涯教育の推進において考慮すべき課題について考察していきたい。

(2) 学習行動・意識内容の特性と課題

① 「頼れるお父さんグループ」対「インテリシルバーグループ」

共に少数派だが参加率の高い学習項目が多い類型Cと類型Hを比較すると，先ず，参加率の低い学習行動項目数では，類型Cは7項目と多いが類型Hは0項目と対照的である。その行動内容をみると，類型Cはスポーツや地域活動へは積極的だが，個人でも集団でも，明確な目的をもって行う狭義の学習に参加する人が非常に少ないことがわかる。他方，類型Hは地域に関係する活動や学習への参加率は類型Cと同様に高いが，スポーツに関する項目で特に高いものはない。その代わり個人で行う行動項目が非当に多い。これらの点から，“勉強よりも運動”が類型C，“運動よりも勉強”が類型Hの特徴のように思える。

ところが類型Cは，学習意識の面では全員が「日常生活，知識・教養必要」と答えていることを代表にむしろ学習要求は非常に高い，またそのためか，「浜岡町・成人学習活動盛ん」「勉強機会や場，浜岡町多い」等の学習状況に対する肯定度は非常に低い。他方，積極的に行っているスポーツの場合は要求のレベルも高く，「趣味・スポーツ奨励への援助必要」の肯定度が高く，「スポーツ施設十分」への肯定度は低く，従って現状への評価は低い。また，「主婦・趣味やスポーツ良いこ

と」の肯定度が高く，女性が家事以外に活動することを評価し，「団・サークルの青年好ましい」や「地域の人達は助けあうべき」への肯定度が高い一方で，「地域つながり薄くなった」の肯定度が低いことが特徴的である。

他方，類型Hの場合は，類型Cと異なり，行動と同様に意識の面でも学習の必要性を強調する項目の肯定度は高い。また，「気軽に図書館（室）などで勉強する雰囲気」があり「文化施設十分」と浜岡町全体の学習状況に対しても肯定度は高い。ただし，「趣味・スポーツ経費自己負担」を肯定し，スポーツに関し「試合に勝つ」「技量」を高めることへの肯定度は低い。この面でも類型Cと対照的である。さらに，主婦に関しても類型Cとは違って，「家事・育児」に専従することを肯定する意識が強く，「職業をもつ」ことへの肯定度は低い。また「したいことができる青年」には評価が低く，「高・大生」「子供」の地域参加を評価。さらに，類型Hの特徴は，「老人・知恵・社会に」や「老後のために特技を」に肯定度が高く，逆に「祖父母・孫の面倒」の肯定度は低いことであろう。

ところで，図-1に示したように，類型Cは「頼れるお父さんグループ」（地元の三十代後半，地域で積極的に活躍する男性が典型），類型Hは「インテリシルバーグループ」（地元の学歴の高い高年齢の男女で，現在の浜岡のリーダー）というのが，両類型の属性上の特性によるネーミング（意味づけ）である。このネーミングの特色と上記の相互の行動と意識の特性を重ねて考える時，より明確にその問題の所在が把握できよう。

すなわち，類型Cが「頼れるお父さん」として三十代後半の地元出身の男性が中心であるとすれば，浜岡町はかって自分が育ち今また家族を支え子供を育てる場である。とすれば，浜岡町の現状への不満の多さは，浜岡や地域に対する拒否意識ではなく，むしろ積極的な愛着故といった方が正しいのではないか。町全体や自分が生活する場である地域の現状改革への意欲の高さに反し，それを現実化できる方法や時間的余裕の有無，あるいは責任・立場とのギャップへのいらだちが現状批判として現われているとも解釈できる。

逆に「インテリシルバーグループ」と名付けた類型Hの地域での活動や学習への積極性は，現在の浜岡町のリーダーである立場を背景とした現状への肯定意識に支えられたものではないか。また，主婦や老人のあり方への意識にみられるように，一方で伝統的な価値を持ちつつ，他方で高齢者が時代の変化に能動的に対応することを肯定する意識に支えられた積極性でもあると考える。

従って，両類型は地域との関わりに関しては類似した行動をとるものの，その行動の意味は相互にかなり異なるものと考える。

また，自分ではやっているとは言えない類型Cの町全体の学習状況への評価が

低く，積極的に学習している類型Hの評価が高いことは，意識と行動の関係を見る上で興味深い。例えば仮に，類型Cには，自分達のニーズと浜岡の現状が適合的ではなく，類型Hには適合的であるとする。とすれば，一般的には浜岡の施設はかなり優れていると考えられることから，類型Cのニーズに応えるためには，従来の施設整備の延長線上ではなく，質的な施策の転換が必要になると言えよう。あるいは，もっと単純に，行動していないことが即学習ニーズがないことではなく，また，学習意欲が現状改革とは必ずしも結びつかないともいえる。

② 「活躍する役職おじさんグループ」対「活躍する中年婦人グループ」

類型Bと類型Gは共に参加率の高い学習行動項目は6。しかし類型Bには参加者が0か1～2人という行動が9項目あるの対し，類型Gは0である。その行動内容をみると，類型Bは地域活動に類する学習機会には非常に参加するが類型Cと同様に個人で行う狭義の学習は行っていないことがわかる。他方，類型Gの参加率が高い学習行動項目は，「文化祭」に「出場」や「出品」に代表されるように，地域を舞台に集団で行なう場合が多く，積極的で狭義の意味での学習である。

そしてネーミングは類型Bが「活躍する役職おじさんグループ」。地域活動に熱心な地元の中高年の男女で農業に従事する地域有力者が典型である。類型Gは「活躍する中年婦人グループ」。地元の中年以上の主婦が中心で地域での学習活動に最も熱心な人達である。

意識の面でも，年配の地域有力者が典型である類型Bは，地域組織の活動に積極的に参加していることを反映し，公民館や集会所等の施設活用を評価する一方で，「近隣つき合い面倒」への肯定度が最も低い。さらに類型Bの特色は「祖父母は孫の面倒を」「老人は老人だけ」の項目である。「父・夫家事なし当然」も含めて，伝統的な男女観や高齢者の立場への関心が高いことは類型Hと類似しているが，「特技」によりも「孫の面倒」の方に高齢者の生き甲斐を見出すタイプの人が多い点で類型Hとは異なるといえよう。

地域での学習活動に「活躍する中年婦人」を代表とする類型Gの意識は，やはりその行動を反映してか，浜岡の「文化活動」「学習施設」「学習機会」に対する評価は非常に高い。また，年齢や立場故か，婦人の「婦人会や学級への参加」を肯定する一方で，「青年の行き過ぎ」には寛容だが，「父・夫は家事なし」には同意者は少ない。

どうも，地域への積極性といっても，地域組織での活躍と学習活動への参加とではかなり異なる意味があるようだ。そして，それが類型Bと類型Gの差に見られる性差や地域での立場の差に一元的に固定されるようなものである場合，その解消が地域住民の生涯学習拡大にとっての重要な課題となるのではないか。

さらに，類型Bにとっては，地域での活動がどこまで自己の成長や地域の改善という意味での学習の契機になっているのであろうか。従来の慣習の維持や仲間との交流のみに終わっていないかどうか。そしてこのことは，類型Gの学習活動への参加の意味にも問うことができる。

すなわち，生涯教育を地域において展開する場合には，「地域」「地域組織」「地域活動」「学習」の意味とそのあり方を，新たに問い直さなければならないことを，地域での活動や立場と学習が分離した両類型の差は暗示していないだろうか。

そこで，この点にも配慮しつつ，地域に対して必ずしも積極的でない類型に目をむけたい。

③ 「がんばるお母さんグループ」対「土地っこ若い衆グループ」対「新住の若い専門家グループ」

参加率が高い項目が3個である類型A，類型D，類型Fの場合，低い参加率の学習項目をみると，類型Aが個人，集団ともに狭義の学習行動が5項目並んでいるのに対し，類型Dと類型Fはいずれも0項目である。参加率の高い学習行動の内容も対照的で，類型Aがつきあい程度に地域活動へ参加する以外は何もやっていないのに対し，類型Dと類型Fはいずれも個人で行う明確な目的をもった学習への参加であることがわかる。

ネーミングは，類型Aが「がんばるお母さんグループ」。学習は低調だが，それは三十代後半の子育て真最中の女性が多い故であると考えたため。類型Dは浜岡に新しく住むようになった高学歴の若者が典型。従って「新住の若い専門家グループ」。それに対して，地元の若い男子が中心なのが類型Fで「土地っこ若い衆グループ」と名付けた。

類型Aはほとんど学習らしいことはやっていないが，意識の面では，「18．子供・クラブ活動熱心よい」や「20．子供・家庭で手伝いさせるべき」と学校に通う時期の子供の教育への関心が高いことが特徴的である。また，地域活動の意義を肯定することに加え，仲間づくりとしてスポーツを位置づけ，そのために利用しているのか，浜岡の体育施設への評価は高い。

民間の教育機関や既存の公教育と異なるという意味での地域での学習の特性とは，その学習内容や学習機会が住民の日常生活に直結するニーズに応えうるものかどうかではないか。その意味で，小・中・高と進む子供の教育やしつけに最も悩むことの多い「がんばるお母さん」の学習ニーズや時間帯に，地域の学習機会が適したものであるかどうかが，問われなければならないであろう。「がんばるお母さん」には，学ぶ意欲がないのではなく，日々の忙しさを切り詰めても学ぶに足る内容や場が見出せないというのが実体でなければよいが。

類型Dは個人で行う学習行動が特徴的であったが，意識の面では「趣味・楽しみに時間・経費惜しむな」の評価が高く，「青年期・勉強や仕事打ち込むべき」への評価が低いことを典型に，「試合に勝つ」「練習技量」等のスポーツへの評価も含め遊び志向が強い類型である。また，「地域つながり薄くなった」として「地域よりも個人的事情を優先」すると考え，「婦人も職業もった方が良い」「父は子の教育にかかわる」などの男女観をもっている。学歴が高く地域や伝統から自由な若者，すなわち「新住の若い専門家グループ」の特徴である。

さらに注目すべきことは，類型Dにとって，地域活動参加率の低さや地域より個人を優先する意識が，そのまま地域での学習自体を否定してはいないことである。むしろ，「学校を地域に開放」や「学級・講座，教育委員会で開け」に対する肯定度が最も高いことから，学習ニーズを満たす場として身近な地域の施設の利用を最も積極的に望んでいる類型ともいえる。

それに対して類型Fは，他の類型に比較して特徴的な意識はない。この類型には，浜岡生まれの「土地っこ若い衆」が多い。それにも関わらず，際立った特色をもたないとすれば，そのこと自体が特色であり問題でもあるといえるかもしれない。意識が自己の立場の何らかの反映だとすれば，肯定否定を問わず特別な意識をもたなくてもすむ立場は，その機会や能力において，現状に積極的に関わる可能性が少ない立場とも考えられるからである。

浜岡町には様々な人達が生活している。その中で，地域において積極的に自己の生活様式や価値意識を顕現する人達としない人達の差が，地元育ちと新しく住むようになった人達，あるいは年齢や性などの属性上の差異により分けられるとすれば，ここにも今後の課題が存在するといえる。そしてその問題が集中しているのが類型Eであろう。

④「るんるんギャル・ママグループ」が意味する問題

我々が地域での学習の可能性を最大限考えて用意した学習行動のいずれにも積極的な参加が見られなかったのが類型Eであった。特に，地域に関する活動や学習機会への参加率は極端に低い。このことは学習意識の面でも確認できる。

まず，肯定度が高いのは，「生活便利であまり勉強必要なし」と「近所づきあい面倒」である。学習行動全般への消極性と地域活動への不参加に対応している意識と考えられる。また，肯定度の低い項目を見ると，やはり学習の必要性を強調する項目や地域に関わる項目が並んでいる。特に，地域への参加が関係する行動は，子供，青年，主婦と全ての立場で肯定度は低い。加えて，子供の育て方や主婦のあり方に対して，「がんばる母さん」である類型Aと異なり，「子供・束縛せずに育てる」の肯定度が最も高く，逆に，子供が「グラブ活動」や「地域活動」

に参加し「手伝いさせる」ことへの肯定度は低い。

この類型Eに我々がつけたネームは「るんるんギャル・ママグループ」。浜岡育ちの未婚の女性や浜岡に新たに住むようになった若い主婦など，いずれも二十代の若い女性がこの類型に属する住民の典型だからである。

多分，どの地域にもこのようなグループは存在するのではないか。そしてその扱い方に苦慮している地域リーダーも多いのではないか。しかし，このグループが我々に教えることは，上述したように，現在の地域で行われている学習機会ではそのニーズに応えないという事実であって，このグループには学習意欲がないということではないと考える。

むしろ，逆にこのグループの人達が地域に対して消極的であるとするならば，先ず，この人達にとって地域がどのような意味をもつかを問うべきであろう。地域への積極的な関わりは，地域活動への強制ではなく，地域と関わることへのメリットの自覚を通じて培うべきものであろう。その意味で，類型Eは，現在の地域が，その土地に新たに住むようになった若いお母さんや，そこで生まれ育った若い女性に対して，どのようなメリットを与えてきたかという観点から見直す必要性を我々に教えているのではないか。

あるいは，地域における生涯教育推進の今日的課題は，類型Eに属する人達のニーズへの対応，あるいはその積極性を引き出す方法や機会の創造に集約されるといえば言い過ぎであろうか。

むしろ，類型Eを巡って提起されたこのような地域課題への視点は，地域への行動や意識の積極性の有無に関わらず，全ての類型に向けられねばならないと考える。なぜなら，たとえ地域活動に積極的であっても，類型Bや類型Hの地域活動と類型Cの地域活動の意味，あるいは類型Aの地域活動への意識の間にはズレがあったからである。また，地域活動には消極的だが地域での学習自体を拒否しているわけではない類型D。地元の若者が多いにも関わらず，ほとんど特徴的な意識や行動を示さない類型F。これらの類型にとっても地域とその活動やそこでの学習の意味は異なると考えるからである。

逆に，このような類型による地域との関係の差を無視した一方的な地域活動の強制やその意義の強調は，むしろ地域から多くの住民を離反させる結果となる可能性がある。少なくとも，従来の地域観や地域活動のあり方を前提とする限り，町の現状を肯定し積極的に参加するのは，いずれも年配者の比率が高い類型Bと類型Gと類型Hで，合わせて32.3%。三人に一人にすぎないのである。

さらにその一方で，今後の浜岡を担うべき類型Aや類型Cの不満を高め，未来の浜岡を託すべき類型D，類型F，そして類型Eが益々地域活動を無視もしくは

拒否するおそれがあることもまた指摘しておきたい。

4．結び

学習行動・意識に関するこれらの調査を基に，浜岡町の教育課題として第一に提案したことは，「古くからこの町に住んでいる人，新しく住むようになった人を含め，いろいろな考え方，態度，行動をする人々を，互いに認め合い，受け入れあい，それぞれのタイプの人々が，その特性を生かし，協力して活力ある地域づくりのできる仕組みを確立すること」であった。[4)]

学校に行きたくても行けなかった時代には，行ける学校ができたというだけで誰にでも喜ばれた。それと同じように成人にとっても，何かを学びたくても学ぶ手掛かりが全くなかったころでは，どんなものでも学ぶ機会ができたということはそれだけで素晴らしいことであった。たとえ強制された学習でも，それによってより苛酷な労働から一時的にせよ解放されるなら，それは歓迎されることであった。貧しく選択肢の少ない状況のなかでは，教育（学習）の機会が与えられるということは，それだけで恵まれたことと考えられた。

しかし，マスコミの発達によって存分に情報が提供され，交通機関の発達と交通手段の多様化によって行動の範囲が拡大し，民間のいわゆる教育産業を含め，さまざまな教育（学習）機会が身近に存在しているという状況のなかでは，人々の学習行動も当然異なったものとなる。学習機会がふんだんにあるから，かえって学習に対する貪欲さが失われ，あるいは，必らずしも適切ではない学習をするということがあり得る。また，「望ましい」とされる教育(学習)，「かくあるべし」とされる教育（学習）に人々の関心が向けられるとも限らない。われわれの調査結果は如実にそのことを示している。

たしかに，地域社会において人々が安全で安心した生活を営むためには防災，交通安全，環境保全，青少年育成等，住民が相互に協力しあわなければならない（そのための学習が求められる）問題がある。しかし，日常生活の中で，これらの活動に向けられる時間は必ずしも多くないし，都市化の進展と制度の充実，職務の分業化，専門化によって，それが望ましくないにしても，だれもがそれらの活動に積極的に参加しなければならない事態は，ほとんどみられなくなってきている。

経済的にも物質的にも豊かさが増大し，社会生活における行動の仕方が多様化し，社会的な許容度が広がるにしたがい，人々の学習行動（地域活動への参加を含めて）の選択肢が広がる。そこでは，例え他者から見て望ましくない選択をし

ても，明らかに公共の福祉に反するものでない限り，選択する者の判断にゆだねざるを得ない（その結果についての責任は当然それを選択した者の責任に帰せられるが)。

学習行動（地域活動を含む）は，その方がよい結果が得られるとわかっていても，基本的には学習者に強制されるものではない。それゆえ，従来，いや応なく参加しなければならないという状況のなかで行われていた学習を学習者が自発的に積極的に行う学習に転換しなければならないという問題が生じてくる。

従来，多くの場合，地域での学習機会は旧来の地域組織と地域活動への同化を前提として計画・実施され，計画の企画推進も長くその地に住む高齢者や地元有力者が多く，必ずしも分化した多様な層の意見を反映できる組織とはなっていなかった。

本来，地域生涯教育計画の目的は住民の学習機会の保障とともに，学習を通じたコミュニティーの再形成にある。それゆえにこそ地域生涯教育計画の第一の課題は地域住民を一元的な地域同化としてではなく，異質性・多様性を前提とした統合の方法や仕組みの創造であることを改めて認識しなければならない。

〔付記〕

本稿の執筆は，共著者の共同研究・討議を踏まえ，主として1．2．3．を馬居が，4．を角替が担当した。

また，本研究のもとになった浜岡町における調査は，(a)幼稚・保育園児の保護者調査，(b)小・中学生とその保護者調査（第1・第2次)，(c)高校生調査，(d)住まい方調査，(e)生活時間帯調査の六種に別れ，それらは，静岡大学教育学部教授外山知徳，同山本章，同望月雄蔵，同助教授落合良行，常葉大学講師瀬戸知也の各先生方との共同研究により実施した。さらに，調査実施に当たっては浜岡町教育委員会並びに同町の幼稚・保育園，小・中学校，各公民館・児童館，県立池新田高校の方々にご協力をいただいた。

なお，調査結果の発表については注1）と4）を参照いただきたい。

注

1）本研究の経過

各調査の実施概要と分析結果については，次の『静岡大学教育学部研究報告』を参照いただきたい。

① 「成人の学習行動の分析に関する基礎的研究（Ⅰ）一御殿場市における生涯教育調査を中心に一」『(教科教育学篇）第15号』　1983年3月発行

② 「成人の学習行動の分析に関する基礎的研究（II）ー土肥町における社会教育調査を中心にー」『(人文・社会科学篇）第37号』 1986年3月発行

③ 「成人の学習行動の分析に関する基礎的研究（III）ー浜岡町における成人の学習意識・行動調査を中心としてー」『(人文・社会科学篇）第39号)』 1988年3月発行

2）31種の学習行動の内容は，表-4に略述した。また調査は各学習行動についての1年間の参加の有無を問うものであ。なお，詳細は注1)の③の研究報告を参照いただきたい。

3）各調査の実施概要

	実施年	対　　象	調査方法（　）内は回収率
静岡県民	1986年3月	静岡県を都市・中間・農村部に分け選出した10地点において、無作為に抽出した20才以上75才未満の成人1,000名	質問紙の郵送による配付と回収（75.0%）
浜岡成人・有識者	1987年11月	① 一般成人 浜岡町在住の20才以上75才以下の成人の中から無作為に抽出した1,000名 ② 有識者 浜岡町教育委員会により有為抽出された164名	(a) ①②ともに、浜岡町の地域組織を通じて、調査票を調査対象者に配付、約一週間後に回収 (b) 地域組織未所属の対象者には、浜岡町教育委員会を通じた郵送法 （① 93.5%、② 84.0%）

4）浜岡における全調査結果の分析をふまえ，全町民への配布を目的に編集した『浜岡町の教育課題』（浜岡町教育委員会　1988年12月発行）において，次の六項目にわたり教育課題を提案した。

① 町民の相互理解を深め，町の文化を共有し，町内の人材を町全体に生かす
　ー伝統的な農村的連帯感と近代的な都市的解放感の融合ー

② 多世代家庭，多人数世帯の特質を子供の教育に有効に生かすための方策の確立

③ 広い家屋，豊富な農地，ふんだんな自然を教育活動に有効に作用させるための方法の確立

④ 世代交流を促進し，生き生きとした生活をつくりだすための社会教育の充実

⑤ 親，地域の教育への参加と地域に根ざした学校づくり

⑥ 地域における生涯学習のシステム化とその基本的デザインの確立

なお，調査結果の分析と提言をまとめ，本年末に『家庭・社会・学校ー地域の教育課題ー』（仮題）を公刊する予定である。